

雨の中の犬

伊藤桂一



講談社

雨の中の犬

伊藤桂一

雨の中の犬

定価一、二〇〇円

第1刷発行 昭和58年9月20日



著者 伊藤桂一

装幀 武山 忠

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

〒一一二 振替 東京八―三九三〇

電話 東京(〇三) 九四五―一一一

印刷所 株式会社精興社

製本所 黒柳製本株式会社

©伊藤桂一 一九八三年

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替えます。

●目次

名のない犬……	7
花の中……	29
相似……	51
九官鳥……	71
湖畔にて……	93
借りた犬……	117
犬の出産……	141
雨の中の犬……	165
里帰り……	189
火の周辺……	213

雨の中の犬

名のない犬

その、生後約三ヵ月の牝の狎は、名前をイイ子——と呼んでいた。便宜的な呼び名だが、それしか名がなかった。正規の血統書の届いてくる前に、すでに死んでしまったからである。犬舎が、売りに出した犬だから、名前はついていたはずである。あれは、どういう名前だったのだろうか——と、それをたしかめてみたい気が、のちのち要助の頭から離れなかったのは、さぞかしい名——がついていたろう、と想像できたからである。

その犬は、置物の美術品のように、この世のものとも思われず？——美しかったのだ。歩いていても、立ちどまっても、手に抱き上げてみても、価値のある重みが、息づいていると思われた。狎は、通称はともかく、血統書にはなかなかいい名がついていて、たとえば牝だと小鈴、琴千代、百合姫、三重菊、梅乙女などと、ちょっと芸妓の名を連想させる。

さて、その、いい名のわからずじまいのイイ子——の死ぬ前のことだが、その日の午前、獣医のA氏が、イイ子を、要助の家の応接間の絨緞の上に（大丈夫か？ 歩けるか？）といった顔付で置いたとき、犬は、一歩も歩けず、へたへたと腰をついた。獣医は、それまでも、懸命の手当をくり

返していたのだが、それで、ようやく（これは大変だ）という表情になり、また抱き上げて手当に専念したが、それをみながら、要助は、

（これで、この犬は、死ぬな）

と、予感した。

イイ子が死んだのは、それから二日目の午前である。要助には、この犬を死なせてしまったことに、どうにも深い心残りがあった。狎としてのみごとさを惜しむほかに、しくじった、死なせずすんだのに、という、自身の不覚についての、悔恨が、いつまでもつきまとして来たからである。

文筆家の中には、犬のことにくわしい人も何人かいて、要助は、出版社関係のあるパーティーの席で、そうした犬権威の一人であるK氏に、狎を飼いたいと思っているのだがどうだろう、飼育者のクラブとか協会とかいうようなものがあって、素姓のしっかりしたのを手でできるのだろうか、ときいたとき、K氏は、あまり乗気でない顔をして、短く「きいとくよ」といったきりだった。乗気でないのは、紀州犬や柴犬と違って、吹けば飛ぶような愛玩犬にすぎない狎など、興味の持ちようがないからだろう、と、要助は、その時はそう思った。庭も狭いし、ほかにわけもあって、紀州犬や柴犬は飼えない、狎でないと困るのだ、ということについて説明しようと思ったが、きいとくよ、と冷淡にいわれると、その氣力を失った。紀州犬や柴犬が好かれるのは、利口で強い犬だからである。その点狎は、もっとも弱い犬の代表である。

ところがK氏は、返事の冷淡な割に、やることは親切で、二日目には、狎の入手についての、すべての手筈をつけてくれて、要助のところへ電話をくれている。それによると、日本犬保存協会の役員の一人である獣医のA氏が、狎の犬舎ではもっとも有力なT氏に頼んで、よい売手をさがしてくるよう手配してくれている、万幸、A氏に任せておけばよいが、礼金等は何も要らない、ということだった。そうして、それから五日目にA氏から電話があって、要助は中央線S駅でA氏と待ち合わせて、T氏の犬舎を訪ねたのである。A氏がここまで面倒をみてくれたのは、K氏との関係があつてのことだが、そのほかに、とかく落ち目になり勝ちな狎を飼うという奇特な人のためには、骨を折らなければならない、という気持もあったからだろう。それにまた獣医という仕事は、その仕事の客である、犬の飼主との接触をはかっておかねばならないからでもあったろう。

T氏の家は、閑静な住宅街の一角にあつて、古いが大きな家で、この人は狎クラブの支部長をしている。自身、四十余匹の狎を飼っていて、門をはいると、庭の一隅に二坪くらいの金網で囲んだ犬舎があつて、そこには大きな狎が二匹いて、眼を剝ひいてすさまじく吠え立てた。

「これは番犬です。狎は訓練するといひ番犬になります。それに、敏捷びんしょうですから、猪獺にも使えるのです」

と、A氏はいった。しかし、訓練しない、愛玩用専門の狎は、ただ優雅なだけである。T氏の家の応接間へ通されると、板敷の上で、四匹の狎の仔が遊んでいて、長椅子の片隅に、五十歳位の婦

人が一人、ちょこんとすわっていた。これはあとでわかったことだが、四匹のうちの三匹はその婦人が飼主で、他の一匹は、T氏が斡旋あつせんを引きうけて、自宅に預かっているのである。要助は、四匹の犬を、A氏と相談しながら、どれを選ぶかをきめればよかったのだ。といっても四匹の狎なの仔は、それぞれ値段がついていて（これは仲間相場なので、犬屋で買うより半分近く安いやすいのだが）それぞれ四万、三万、二万五千、一万二千と値がついていた。そのうちの、四万——というのがイイ子で、生まれたときから、展覧会で優勝するための宿命を負っているような犬にみえた。人間でいえば明眸皓齒めいぼうこうしだ。よくもこれほど精巧にこしらえられた、と思われるくらい。全身をタンポポの綿毛のようなやさしい毛並に包まれていて、愛らしくして気品に富む。

「それは値は張りますが得難い犬です。しかし小さいから、産ませてふやすのなら、身体の大きい三万のほうがいいと思いますね」

と、T氏はいった。A氏もそれに肯うなずいた。T氏は六十歳位で、もちろんこの道では最高權威の一人である。要助は、応接間の床の上を歩き廻っては、時々おしっこをしている仔犬たちを、一匹ずつ抱き上げては掌の上にのせてみたのだが、どれも悪くない。しかし、イイ子は抜群で、たとえば陶磁の銘品を手にとると、それを手離し難くなる、そういう心境になって、結局イイ子を選ぶことになったのである。美女薄命というのは、人間の世界だけのことではなく、狎の世界も一そうにそうなのだが、要助が、美的にのみ判断してイイ子を選んだのは、あるいは誤りだったのかもしれない。

かった。仔犬はみな回虫の厄を蒙るが、イイ子は、特に抵抗の弱いことがのちに証明されたのだ。けれどもその時は、要助は、華麗な生きものを入手した喜びのことしか考えずに、イイ子を段ボールの箱に入れてもらい、T氏の家を出ると、途中でA氏と別れ、あとは車を拾って帰宅したのだ。実をいえば、犬を飼うことは要助の、少年時代からの願望でもあったのだが、五十歳をこえてやっと、それが果たされたのである。

ところで、要助が、犬を飼おう、と考えたわけは、決して自分の願望を果たそうと思ったからではない。犬を飼う、必要に迫られたからである。それも室内犬でないといけない。それに日本犬であってほしい。となると、狎し合いなのだ。

要助は五十歳になるまで、七十五歳の母親と二人きりで暮してきたが、齢をとると炊事も大儀になるらしく母親は「いつまでこんなことをやらせるつもりかね」とひまさえあればこぼすので、それもそうだと考えて（ほかにも種々わけもあったことだが）とにかく結婚することにしたのである。女房になった女は三十九歳で、お互いに、晩婚としては代表的なものかもしれない。要助は、なるべく齢をとって、素直で我慢強く、あまり深く物事を気にしない女——を女房にしたかった。これは、結婚すると、家庭内のバランスが崩れるのではないか、という不安も多かったからである。要助は結婚を考えたとき、母親に「女房をもらおうと必ず嫁と姑の問題が起きて、後悔するこ

とになりかねない。それよりも何とかしてお手伝いさんでもさがしたほうがよくはないか」といった。すると母親は「嫁が来てくれて、家庭の雑事から解放されたら、私はどれほど助かるだろう。私は私でやりたい仕事がいくらでもあるのだからね」といった。それにこの人手不足の時代に、おそれと恰好のお手伝いさんのいるはずもない。そうなると、結婚するしかなかったのだ。

要助は、玉川瀬田に本部のある健康法のN先生のところへ、久しく通って世話になっていたが、先生は健康のことのみでなく、要助の一事上のことについても、なにかと有益の指示を与えられた。結婚の時も、当然、相談に乗ってもらっている。そのとき先生は、要助の場合は、まずどんな女をみつけて結婚しても、家庭生活が円滑にゆくということはないだろう、と、その点をずいぶんゆきとどいて心配をされたものである。そうして、要助の結婚したあとはいっそう、さまざまに教示を受けることになったのだ。

ここでは、要助の結婚の話を書くわけではないので、あまり逸脱もできないが、N先生のいわれた要旨はたいへんに明快で、七十五歳の母親と五十歳の一人息子が生活している家庭へはいってくる女は、戦争でいえば決死隊なみの覚悟がなくてはできないことである、なぜなら息子は五十歳になっただけでもまだ乳離れをしていないとみるべきであり、当然母親のほうも、乳離れをさせていないとみるべきである、するとうなるか（ここで先生はまことに心痛の表情をされた、とそのとき要助はうけとったのだが）きわめて困難な事態が発生してくるのは眼にみえている、しかし、それ

をよく処理して生きてゆくのも人生だから、と、懇々と、要助に諭さとされたのである。要助は月に一度、母親を連れて先生のところへ通い、そのとき自身も操法を受けることにしていたが、その都度、先生のいわれる訓戒のすべてを几帳面にノオトしておいて、日常の参考としたのだ。要助の結婚する前には、あれほどみごとな台詞せりふをいっておきながら、結婚したあとでは信じがたく態度豹変して、古川柳ではないが、嫁いびりと寺参りに憂身をやつしている風の母親と、娘のころ軍需産業の工場へ徴用されて、日の丸の鉢巻をして軍服の製造に懸命の働きを示した、その気概をもっていま、むつかしい家庭へ嫁に来ている女房と、それら両者の争いの渦中に身を置き、しかも偏かたよった判断をしないためには、先生の訓戒を頼みとするよりはかはなかつたのである。

N先生は、嫁と姑との物の考え方の相違は、どちらがどうというのではなく、要するに考え方がすれ違うだけなのだ、とよくいわれた。そういえば要助も、双方のいい分を比較しながら、なるほどと思うことも多かった。たとえば、ある日、要助が自室で仕事をしているところへ女房がやってきて、野良猫が鳩をつかまえて仔猫に食べさせている、鳩がかわいそうだから、せめて残骸だけでも埋めてやりたいから手伝ってくれ、といった。野良猫というのは、要助の家の付近にいて、いつしか仔猫二匹を産んで連れて歩いている。要助も要助の母親も猫は好きだが、猫は雀を捕るので飼えない。庭の椿の枝につけてある餌箱の餌を啄つばみにくる雀をみるのが、母親の老後の楽しみの一つである。それを猫は、草蔭に身を潜めていて雀を待ち、雀が来ると、樹幹を、跳躍に等しい速さで駈

けのぼっては、捕るのだ。それはまさに神技である。その猫が鳩を捕って仔猫に与えているというのだが、これは伝書鳩で、近所の家のが紛れて雀にまじって餌を食べに来るのである。要助はしかし忙しかったので生返事をしたまま、そのことを忘れてしまっていると、夕方、また女房が来て「お隣りの子に頼んで埋めてもらいましたから。なんて憎らしい猫でしょ」といい残して出て行った。その晩、要助が女房によくきくと、この、猫が伝書鳩を食べたことは、母親もそれをみていて、そのとき母親は、猫の仔に向けてやさしくこういったそうだ。「よかったねえ、あんたたち、おいしいものが食べられて。ほんとに大ごちそうだねえ」それから、隣りの子が鳩の残骸を埋葬してしまったことを知ると「余計なことをする子だね。猫のために、あしたに残しといてやればよいのにさ」といったそうだ。つまり、女房にとっては鳩がかわいそうなのであり、母親にとっては猫に同情があるのだ。実をいうと要助は、この、どちらがどうというでもない問題を、考えるとこれはなかなか面白いので、ひまひまに考えているうち、ふいと、犬を飼おう、と思いついたのだ。これには、平常、N先生が、あなたの家庭はどうしても、あなた方とお母さん（かんしやうふつ）とが二対一の形になる。これはよくないから何とかして子供をつくったらか、そうすれば緩衝物（かんしやうぶつ）ができる、といわれたためもある。要助は、先生には適宜の返事をしたが、五十歳と三十九歳で子供を産むのは、二人が鉢巻をして力戦してみても無理のように思える。しかし、とりあえず、なにかの緩衝物があつたら、と考えたとき要助は犬のことを思いついたのだ。これは要助の内部に深く眠っていた、子供のころ